七つの宝蔵

むかしむかし、ある山の奥のまた奥に、人のいい、心の優しい夫婦がいであったんだと。冬で、雪もあったが天気も良くて朝から暖ったかく、二人は山に行って柴でも伐るかなぁって、昼のまんまを背負って高い山に登り、しばらく、しばらく行くと、山の上では雪の上に田植えをしている人がいたんだと。「おーい、おどぉー、おがぁー。こっちに来て田植えさ、手伝ってけれじゃぁー」大きな声で叫ぶ音したんだど。二人は人がいいもんで、手伝って、稲っこ投げたり、植えたり、暇なく働いたんだど。少し日も暮れて、「家に帰るかなぁ」って言うと、「うちに帰るんだば、この苗っこの残ったのを持っていって、家の前の雪の上にずっと離して七つに分けて、今日のうちに植えてけれぇ」って言われて、家に持っていって、日が暮れて暗くなっても、言われたとおりに植えて家に入ったんだど。「今日は田植えして疲れたなぁ。でも楽しかったなぁ、晩のまんまを食べて早く寝るかなぁ」。次の日、朝に早く起きると家の前に蔵が七つも並んで、蔵の前には鍵がブランブランと下がって、二人はびっくりして、夢ではないかと思ってほっぺたをギュッとひねってみても、本当であったんだど。おどぉとおかぁは、その鍵で蔵を開けてみると一つの蔵は、米がいっぱい入って、二つ

目は、味噌や食べ物がいっぱい、三つ目はぜんこ(お金)がいっぱい。四つ目は着る物。五つ目、六つ目、七つと、いっぱい、毎日毎日の暮らしをする道具もいっぱいあったんだど。心が優しいから、他の人に物を頼まれてもイヤと言わない優しい人だから、神様の授かりで、幸せになったんだど。そして村のみんなが幸せに、貧しい人を助けて、村のみんなが幸せになったんだど。とっぴんぱらりのぷー。

仁平佐喜子(鶴形・昭和8年生・65歳)

〈解説〉

長者伝説のひとつ。ごくふつうの夫婦が偶然果たした善行に、宝の蔵が七つも与えられ、村中が幸せになった。だんぶり長者のようにトンポが介在するとか、わらしべ長者のようにものの交換を次々に繰り返すという手続きの煩雑さや、炭焼き長者のように兄弟三人が登場して末弟の善行が報いられるとか、そういう複雑な過程は取らずに、田植えを手伝っただけという単純な行為で長者になっているところに特徴がある。あるいは途中の過程で抜け落ちた行為があったかもしれない。また雪中の田植えなどは年取りの晩におこなう大歳(おおとし)の行事を思わせ、民俗行事の語りにもなっている。